金剛院日與上人について

桃井観城

一　室町時代の法華教団

平安の末期、保元、平治の乱以来打ち続いた戦乱や天災地変は、世人に末法到来の仏誡を痛感させ、厭離穢土、欣求浄土の願いを深めさせたのである。

やがて南北両朝の合一により没落にひんしていた公家貴族や、重税と社会不安におののき、生活の窮乏にあえいでいた下層民衆はこの人生苦から離脱するために、切実に宗教に救いを求めたのである。また新興の武士階層と雖も、生死の解決にせまられ、彼等に納得の出来る道を求めて止まなかったのである。然るに南都の諸宗は勿論のこと、天台、真言の両宗さえこの願いをよそに、或は深遠な教理の探求に、或は加持祈禱に専念して俗権を求め、さきに白河法皇をして「朕の意の如くならざるものは山法師なり」と嘆ぜしめるに至ったのである。

顧ればこの時にあたり、易行道の在家仏教が法然、親鸞により、更に信行道の国民仏教の本地が宗祖により開顕されたので

ある。そしてこの日本仏教は室町時代に至って隆盛を極め、浄土宗が関東から鎮西のはてにまで、一向宗が全国各地に弘伝せられ、我が法華宗が飛躍的な発展を遂げたのもこの時代である。即ち日像菩薩の天奏上洛をはじめとして京都、北陸、中国、九州各地方に多くの信徒を数えその黄金時代をもたらしたのであった。

当時洛中の二十一本山及び、洛内外の末寺寺院等総じて一三一ヵ寺の多きを見るに至ったことは、他宗にその比を見ないのである。禅宗に京都五山ありと雖ども我が各山の規模彼に勝るとも劣らず、足利将軍家の護持また禅宗にとどまることなく、妙顕寺、本圀寺、要法寺、妙満寺をその祈願所としてこれを外護し、不受不施の禁制も将軍家や管領家を除外して、我が教団は大いに繁栄したのである。その後大覚大僧正の出現により、朝廷及び幕府との間に種々の関係が結ばれたことが、大いにあづかって力があったことを忘れてはならないのである。

思うに発足、発展、爛熟、腐敗の過程は宗教教団に於てもまぬがれることは至難であって、打ち続く戦乱と寺領の侵略にその経済的基礎を奪われた諸宗僧侶の中には、或は黒衣の宰相として、或は経済使節として渡海する等、俗権を獲得し一世に時めいた数多くの僧侶もあったが、正純派の教家により僅かにその命脈を維持されたのもまたやむを得ぬ時勢であった。この風潮はやがて法華教団にも波及し、ついに四条門流の紛糾を見たのであるが、この間にあって能く本地八品の法灯を高くかかげ、濁世の暗黒を照破せられたのが我等の門祖日隆聖人であり、その門にあって我が教団隆盛の礎を築かれたのが、能与両山中興日與上人その人である。

二　真光寺「但阿」上人

日與上人は幼名を日有麿と称し、応永三十三年（一四二六）摂州矢部郡（神戸市兵庫区）尻池村に生誕、父に勝蓮、

母に妙蓮の法号を諱されたのである。初め時宗の西月山真光寺に於て薙髪得度され、京都、鎌倉、奈良に遊学行解を積み、二十四才にして大真光寺の院代としてその将来を大いに嘱望せられたのである。

真光寺は一遍上人正応二年（一二八九）八月二十三日示寂の霊場にして、一遍上人絵巻に

「さて兵庫の島より御むかへに船を奉りたりければ印南野の辺にて、りんじうすべき由おもひつれど、いづくも利益の為なれば、進退縁にまかすべしとて、兵庫へ渡りて、観音堂にぞ宿し給ひける」

とある観音堂こそ真光寺の濫觴であって、その奉祀する観音像は仁明天皇の頃、恵尊が唐から請来したものと伝え、後世伏見天皇より今の寺号を後醍醐天皇より山号を賜ったと称する兵庫の名刹であって、播州の守護赤松氏が大檀越となり四囲八町の境内を布施し、寺領三百石を寄進したと伝えるのである。

当寺六代尊観法親王（亀山天皇の皇孫、常盤井式部卿恒明親王の第三皇子で南朝後村上天皇の猶子と伝う）念仏勧進のために当山を出でて遊行の旅を続けられてより、当寺は遊行上人兼帯の寺として住持の僧を置かず、監寺の僧として上人の院代を置かれたのであるから、院代であった日與上人は正しく当寺の住職であったのである。それは今日でも当山では住職たるべき人を御院代と称することによっても明らかである。

このようにして当山は時宗に於ける大道場寺、即ち宗立三檀林の一でもあったから、この大道場を管した日與上人が徳望識見又並々ならぬものがあったと思われるのである。さればこそ「但阿」の称号をもって尊崇されその右に出るものがなかったのである。「但阿」とは但阿弥陀仏の法諱で、但だ阿弥陀仏にならんとの願望を現わした阿号であって、阿号の起源は古く東大寺を再建した僧重源の「南無阿」にはじまるものである。

因に当寺隣接の地に今日道場小学校を見るのもこの由緒を物語るものであろう。

金剛院日與上人について

三　帰　伏　入　門

宝徳元年（一四四九）日隆聖人六十五才の老軀をいとわず中国布教の旅路恙なく兵庫の津に帰航し、正木屋（後に正直屋の屋号を聖人より給う）に帰宿されたのである。この時法縁熟して浜の寺久遠寺の改門帰伏あり、その披露の法筵にあたりて、聖人の化導を伝え聞いた但阿和尚は、親しく聖人の法輪に接し、三秘五綱の大法義の演暢を信受して権門邪執の輪袈裟、念珠を断ち切って寺籔に投げ棄て、聖人の門に入られたのである。時に上人二十五才であつた。

図版1　日與上人御尊像　　尼ヶ崎　本興寺安置

後にこの籔を「タチツテの籔」と称したので、故信隆日秀上人この故事を聞き伝え探し求めたが、神戸市の開発により発見するに至らなかったことを遺憾とされたことは、まことに心温る思いである。

これより早く日隆聖人は四帖抄を著して本門法華の旗幟を宣明せられ、十三問答抄に於て本迹論を明すと共に、本宗教義の結論を宗名に表示されたのであって、宗門の綱格ここに定まり、将に十三ヵ条信心法度を制定せられんとする前年、聖人の門に入られた但阿上人は、この本地の教学に蓋

し仏眼を開かれたものと信ずるのである。〔図版1〕

四　日與上人の教学
――教行証について――

日隆聖人の門に帰伏随身せられた上人は、後に日信、日登、日明、日禎、日増各師と共に隆門の六老と称せられ、学徳兼備、殊に聖人の八品教学を研讃して日忠上人、日朝上人と共に隆門教学の三哲であったのである。

その教学所立の一斑は応仁元年（一四六七）四月九日（日隆聖人歿後四年）円像坊日顕法師が伊州下向の時、その競望嘿止し難く、病中にも不拘「卒示の所述、尚未だ愚慮を尽さず、安ぞ聖意に徹することを得ん。然りと雖ども、唯々蓮隆明眼の月を挙げて、曲会私情の雲を加えず、敢て軽賤すること無し、文の脱落の繕、後賢の許覧を嘘っ焉」と筆録された『教観樹扇録』にその概要を知るのである。

今その原本は敦賀市本隆寺に所蔵せられ、紙数廿五張袋綴。各紙の行数七行、各行十六字乃至廿二字詰で第四十八、四十九丁は詩歌である。昭和十年十月十日赤沢日雄大僧正は隆尊御降誕五百五十年記念にこれを改装、修理保存に万全を施されている。その写真復本を昭和十五年五月本能寺より刊行している往見されたい。

その内容は先づ讃語に続いて教道指南録、観門枢楗録、要蔵示録の三部門から成っている。全巻を通じて博学多才特に歌道に達した上人の麗文華筆は読むものをして、黒衣の沙門、白衣の比丘各々解悟の小智、弘経の微志をいだくも、自行増長の葉は殆んど碧蘿よりも短く、化物遠行の翼は、蒼蠅よりも小さい。故に我等は、僅かに仏祖千尋の松頭に懸り、神力万里の驥尾に附することによってのみ、入空出仮の大極に至らしめられるのである。「大虚を仰いで

小樹を動さんと欲し、重山に向って軽扇を挙げんと欲す」との讃語は一巻を通ずるところの著者の素懐を示したものであろう。

次に第一部教道指南録に於ては権教熟益、迹門脱益、本法下種を論じ「当家の心は第三師弟の遠近を以て立ち還り化導の無始を取る。下種の上に於て一切之を談ずるは本門の教相なり。五味主なり。従因至果は始覚の教相、従果向因は本覚の教相なり」故に在世脱益すら尚ほ下種に帰すれば、権迹当分の益無し、況や末代下種の時焉ぞ未熟の迹門と、譬花の権教とに巨益有らんやと談じ、爾前迹門の円尚ほ仏因と成らず、況や諸宗をやと断仏種を論破して、第三教相を讃仰し、下種とは久遠なり、台家所談の久遠と当家久遠の不同、両家の宗教宗旨の異目を強張されたのである。

続いて第二観門枢樍録に於ては心地の得法について三重の起尽を説き、先づ衆生の心地は貪瞋癡の三毒を以て体となし、爾前権門には唯だ衆生の迷心のみを説いて、仏果の覚心を示さず、故に権教迷心にして未顕真実と説き、次いで今経に至り正しく仏果の悟心を説く、故に一切衆生は始めて仏心を得る。故に迹門仏心にして要当説真実の仏果の心性を示す事を得るのである。然しこの心性も発迹顕本せざれば迷悟相即することなし、従って迹門に於て真の一念三千顕れず、迹仏尚ほ未断惑なり、口に始成正覚を説き、意に久遠実成を了すると雖も言と心と相乖く、故に覆蔵邪見と破し、顕本遠寿の朝、十界久遠の恵日心地の本源に顕れ、九界の迷心、地涌千界の本心に入り、仏果の悟心、正在報身の覚心に帰する時、本因本果一如、真の一念三千を成ずるのである。「今本因妙上行の九界、久遠なる故に衆生妙なり。本果妙釈尊の仏界、久遠なる故に仏法妙なり。因果国の三妙合論するれば一念三千なり。心法妙なり。妙とは久遠と言ふ事なり。師弟の遠妙之を思ふべし」との御指南をもって結ばれているのである。

次に第三要蔵開示録には、自証の要体は上述の教行畢竟の自体にして、教行を離れて自証の法なし、然るに爾前方

便は教理体一の旨を談ぜざれば、権門無証である。実教また三千の依正、一切の諸法は実相の妙心なりと観じ、実法の尚ほ仮証なることを説き、終りに本法の実証なる事を明さんがために、本迹の起尽を示されたのである。更に色香美味に所証の三徳、所説の三学を収む故にあらゆる教証をこれに摂し、擣筵和合に所修の三観、所談の三昧を摂するが故にあらゆる観行を収めて皆悉具足と説くのである。ここをもって、一粒の妙薬に色香美味擣筵和合の功徳を備うること正しく大悲の窮源、易行の終極なることを示されたのである。

「喜しき哉、信心の道俗。報を悪世に感ずと雖も、種智の紅薬を嘗めて不滅の遠寿を得。悲しい哉、諸宗の迷者は心を三毒に起し乍ら本仏に背き、禅徒は良薬医を打つ病人の如し、本法を捨つる教徒は妙薬を嫌う人に似たり。哀むべし、救ふべし」

而るに忠言耳に逆い、良薬口に苦きが故に益々逆仏謗法の非を長ずるも、我祖大士の大悲息むことなく我等を救療し給うのである。これ入重玄門の大士、大化医王の大悲なり。されば

「今吾等、設い身を雪嶺の石窟に投ぐと雖も、争か遠流陸沈の厚恩を報じ上らん。亦た骨を香城の鉄壁に砕くと雖も那ぞ無犯死罪の深徳を謝し上らん。徒に臥し徒に起く冥見怖るべし。空く明し空く暮さんは照覧恥づべし。冀くば信心の緇素、渇仰骨髄に徹し、信心の身毛よだって上は極果の命根を続けまします」

と結ばれているのである。

以上これを要約するに一巻の大意は、教は名字、行は観行相似、証は分真究竟にして、本門の心は、名字本覚なれば教と名とを本となし、教は下種の位なる故に根本なり。之を知らざる諸宗は教の外に証を尚ぶ、これ種を捨てて菓を求むる類なりとの御指南をその根幹とするものであって、殊に注意を要して味読すべきは、名と云うも仮名に非ず

金剛院日興上人について

体なり所詮なり。故に本地の奥蔵と釈する一段である。今述べるところの教行証は、本門総名名が家、本覚の教行証なれば前代未聞にして、一には前十四品に超え、二には即ち一代教門に超える総別の教行証である。これ本地の総別にして超過所説するところなる故に、この旨を明らめざる徒は、台家所伝の証を以て宗極とすることまことに哀むべきなりと、蓮隆両祖の妙判を昂揚されたのである。

最後に数行証を詠じて

枝末八教円珠華　還二帰久遠妙因果一
根本一乗如二金蓮一　誰執二権迹一断二仏種一　（詠教詩）

但中迹理如二星月一　焉得二解氷澄心水一
本門要観是日輪　故致レ開レ顕二智源一　（詠行詩）

四仏近成皆無常　是故知レ莫二不死方一
三身遠寿悉不滅　明在二本法玄妙薬一　（詠証詩）

とあり、まことに簡要よく、台当所立の教行証の三義を弁別して、本地甚深の要蔵を開陳されたのである。

寺主日蓮種暖育　是薬乃理化利
└行体└教旨　└証得

本能教寺苾芻日定
講説法華要品最〻
本門〻所詮為宗〻末世
〻弘通為先厥利實真人
寧其心寂不嘉乎
長禄龍集上章執徐壮月日
桃夷

図版2　日與上人法華要品講説感状（一条教房筆）
京都本能寺蔵

本能教寺前住日与去長禄〻
比叡故禅閤請説法華要品
當住持日增憶其師説今逢
華講讃二日偏説説本門所詮
〻宗旨更增長末世弘通〻得
益隨喜〻參推深信受〻志不
淺者耶
明應龍集講案華剋余月日
亮尊

日增上人方

図版3　日増上人法華講説感状
京都本能寺蔵

はその所懐を詠じたものと謂うべきである。

上人は又一説に一条家の出なりとも伝うるが、天賦の博学、殊に文芸に秀で、当時の貴顕、歌客とも歌学を通じて親交をあたためられたことが、やがて寛正元年（一四六〇）一条関白兼良の求めに応じ、殿中に於て初めて法華経要品を、三日間に互って講鑽されたのである。これ我が門下に於ける、天奏上洛の祖意を結実するもので、その内容に至っては、詳細を知るよしもないが、「教観樹扇録」述作前八年、本化皈伏より十年目のことなれば、大凡そ本地本門八品の綱格に立ちて、要品を縷説されたものと思うのである。その講説は殿上公卿をして感歎措く能はず、一条兼良（桃夷）をして

「本能教寺苾蒭日定（日與）講二説法華要品一最以二本門之所詮一為レ宗以末世之弘通為二先厥一利寔莫大焉其志寧不嘉耶」〔図版2〕（日與上人この頃日定と号され後日與と称したのである）

との筆を執らしめるに至ったのである。

かくして上人は本地の要蔵を開陳する端緒を得られ、愈々宗義の奥蔵を究尽して、遂に「教観樹扇録」一巻の論述を見るに至ったのである。

尚お上人の参殿講経が後世、日増上人（明応四年）をして一条関白教房公のために要品を講説せしめるよき縁由になったことを附記する。〔図版3〕

五　日與上人の学芸

——法華和語記について——

上人が上述の如く我が門下の信行を明示して宗運隆盛の礎を確立され、天奏上洛の祖願を、参殿講経によって要結されたことは、ここに京都布教の祖猷を達成したものと謂うべきである。

それのみならず、上人の学芸の深きことは早くより歌道にその天分を発揮されたものと思うのである。

汝や知る都は野辺の夕雲雀
あがるを見るもおつるは涙　（飯尾六左衛門）

に現われた応仁の乱による京都文化の退廃加うるに一代の碩学、歌聖一条兼良秘庫の蔵書七百余巻の焼失は、伝統文化の衰退を早め、我が敷島の道なる歌道に衰運を招いたのも、これ蓋し当然のことわりである。

即ち万葉、古今は既に遠く且つ古く、俊成の千載、二条家の形式的な歌学が僅かにその命脈を保つに過ぎなかったのである。

この時代にあって上人が、心敬、宗祇、秀句と時を同じうして、我が歌壇に巨歩を遺し、禁裡御歌所の斑に数えられたと伝えられ、その名声はひときわ高かったのである。然し上人は歌道によって、只だ徒らに風流、閑日月を求められたのではなく、この道を法華演説の手段としてその蘊奥を究められたものと思うのである。即ち心敬によって、歌道や連歌を仏法と調和融合させ、幽玄より静寂の詩境が開け、この歌風が後に連歌の巨匠宗祇の句風に大いなる影響を与えたのであるから、この両匠と席を同じうせられた上人の歌風は、またもって想像するに難くはないのである。

上人は延徳二年（一四九〇）十月五日六十五才の老齢をもって、「法華和語記」四巻を謹述し後土御門天皇の乙夜の覧に奉られたと伝え、今その原本は尼ヶ崎本興寺に所蔵されている。この書の構成は法華経を和語を以って解説し、要所要所に花園院、慈鎮、俊成、定家、赤染衛門、源信、和泉式部、法性寺入道、家隆、花山院等の法華詠歌を挿入

金剛院日興上人について

金剛院日興上人について

引用してその意を明かにしたものである。正保四年（一六四七）洛陽今出川書堂の林和泉により、四巻本として開板され、広く一経の大意を和歌の道に托して流布されたものと信ずるのである。

今その奥書に

「抑〻上来の所述深妙の浄法にあさはかの解を加え極妙の円理におほとかの詞をそへ侍るに似たり……非をすて理をとりなば、ねん比に御覧せ深理もあらはるべきか。加之品々に所載如来誠諦の妙文なり句々に所記明師内鑒の高判なり、作者の私を存せず……和歌の浦の浪によせて真如海をあらわし、浅か山農みちを尋ねて玄宗地にいたる事此国の古風也……今作者の所存一念信解の微志をのべて五十展転の勝利をあふぎ、法の恩、国農恩を報じ奉らん云々」とあるは著者が述作の素志を物語るものである。更に

「若人浅をさり深につき、下れるをしりて高きをもとめ、本地の三宝を信ぜられば、生死夜来の眠醒て本覚晨朝の日朗ならん」

とその発願を明かすと共に

「一句一偈菩提を増進し一色一香永く退転なからしめたまへ」

とその発意を成就されたのである。これまことに上人の如き深淵なる学芸と非凡の天賦にしてはじめて大成するところで、前人未踏の境を開かれたものと謂うべきである。

尚ほ上人の詠み給うた和歌の二三をあげると

○日のみ影さやかにてらせ雨となり風となり行くゆく末の空

○きのふまでよそに忍びし下萩の木の葉のつゆに秋風そふく

○その跡の学ひを開けは遠くしてやふなる窓に雪そ降りくる
○おもひねの夢路にゆきて布み見るや花の高根の雲のかけはし
○はるる夜の星と月との光をもおさめて高き日のみかけかな（得入無上道）
○季へぬる病のゆかの調にもまこと御天の月そのこれる
○てらせ月つれてをゆかん苔の下草の陰野の露の底まで
とそのいづれの一首にも脈々として上人が法恩報謝のために法華を演説せんとされた熱願をうかがい知るのである。

――落葉集について――

更にまた、我が歌壇に於て、座興の余技として流行していた所謂連歌が、当時枯渇した文壇に抬頭して、「敷島の道」に対して「筑波の道」と称せられ所謂連歌史上筑波時代を織り出したのである。即ち連歌は二条良基によって文学的地位を高めると共に、色目（方式）を定め、その孫にあたる一条兼良によって連歌の興隆期を迎え、宗祇によって新撰菟玖波集が編纂されたのであって、この歌集は、菟玖波集（二条良基）犬菟玖波集（山崎宗鑑）と共に三菟玖波集と称せられる名集であってこの時代を菟玖波時代と称するのである。

上人既に前述の心敬、宗祇とこの道に於て相交わり、宗祇が本能寺に渡り給いし時、日興法印の坊にて

暁　鷹　　宗　祇

露けさそそのこゑならぬ天津鷹
　こえもかくこそ聞しね覚に

金剛院日興上人について

金剛院日與上人について

旅宿　　宗祇

誰となき都のこゑを蘆垣の
　ちかき旅ねに哀れとそきく

円光院にて　　宗祇

のほる水ありてやこほる空の月

と詠じたのである。又当時公家学者として、或は歌聖としてその名声一世に高かった、一条兼良公にも知遇を得られ、これらの巨匠に伍して、連歌の座に列し給うた上人の地位とその才能は推して知るべきで、その詩味の高雅であり、且つ幽玄閑寂の心境に徹した純正連歌の道を宗祇と共に歩まれたものと信ずるのである。

即ち文正元年十月廿五日（一四六六）本能寺大書院には一条関白兼良公をはじめとして、心敬、半井三位、毗観、利在、有実、忠英、貞奥、伝芳、平成、立承、正頼等の連歌師相集り、日明、日與両上人の勧進により大連歌の宴が催されたのである。その句集は落葉集と称して今は本能寺に秘蔵されている。即ちその発句には寺号を詠みこんで

（発句）木の本能寺井にたまる落葉かな　　一条太閤
（脇句）ふりぬる庭にさゆる松風　　日明
（三句）昨日のくもと秋や行くらん　　隆蓮

等と連歌は次ぎ次ぎと詠じ続けられたのである。「隆蓮」とは日與上人の雅号である。

又上人の連歌は「新撰菟玖波集」に輯録されるもの十一首にして、その内五度は内裏の、一度は仙洞御所の連歌の座に伺候して詠ぜられたものである。このことは先の参殿講経の因縁を物語るものとして忘れる事の出来ない事は勿

論であると共に、上人の文芸布教の実体を知る有力な資料である。今その所収の一端を紹介するならば次の通りである。

ちらすははなにいく夜かもねん
　みしかきはるの夜はふけにけり　（巻三）
とをき野の草のすゑ葉に月出て
　むかひやいつくふねかよふ見ゆ　（巻四）
よこ雲に今しはしともいひあひて
　またふかきよにのこるむつこと　（巻八）
人は世に幾たひ浮ひしつむらん
　又しくれゆくなかそらのくも　（巻一七）
月やけさわれても残るうすこほり　御製

冬の発句に

朝戸あけてわするるゆきの夕かな　日與（巻二〇）

尚ほ御製は後土御門天皇の作でこの歌集には日應権僧正、の外貞常親王、邦高親王等伏見殿のものを多く収録していることは、連歌を通じて伏見宮家と當宗との関係を知る新資料である。これについては後日、日承上人の項にて改めて述べることにしよう。

上人の述作については左記の書目を知るのである。

金剛院日與上人について

金剛院日興上人について

○教学関係

教観樹扇録

妙経大意（三帖抄）

略　経　抄　四巻

名目見聞　八巻

本門妙経（十四帖抄）

観心本尊抄見聞　一巻

法則論義読抄　二十八品

本門論議抄　二十余巻

述　作　抄

類　　雑　十巻

碧　羅　章（文明五年二月義政に献じた）

○文芸関係

法華和語記　四巻　開版

新撰菟玖波集　宗祇撰（上人詠十一首収録）

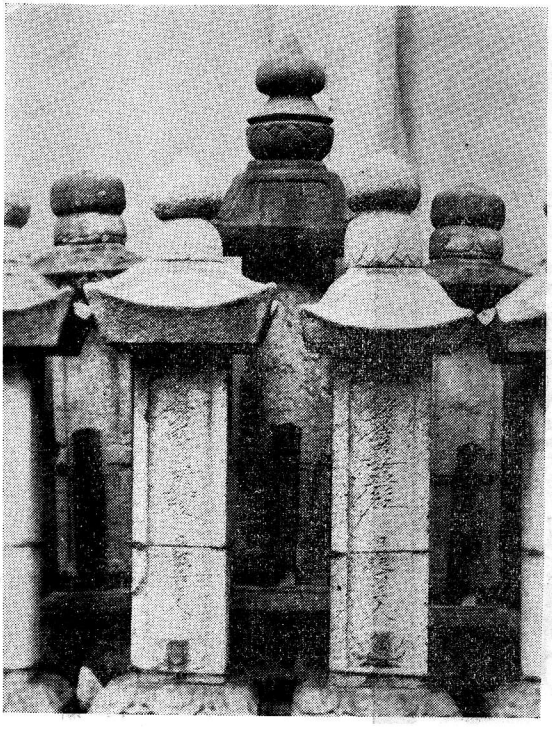
以　上

六　上人と教団組織

我が法華教団の組織は、既に日隆聖人によってその大綱が明らかにされ、その宗門行政に関しては末頭制度と貫首制度（両山）を定め、その信行面に関しては、信徒に信心法度十三ケ条、出家に本能寺法度七ケ条を垂示されたのである。然るに寛正五年（一四六四）日隆聖人御入滅になるや、その中核を失う危機にひんしたのであるが、幸い日與上人は本興寺に入って、本能寺日明上人と相携えて、宗門発展の基盤を確立されたのである。

即ち本山制度を制定して宗門行政の枢要は本山中心の信行道を確立するにあるとし、「本隆寺本妙寺法度十三ケ条」に本末関係を、「当門徒両寺法度」に本山規則を巨細に互って規定されたのである。

これ実に上人は、先に稀有の才能をもって興学布教に資せられたのみならず、今また非凡の叡智をもって我が教団組織の依拠である諸法度



図版4　日與上人墓　京都本能寺安置

金剛院日與上人について

を制定し、宗門百年の繁栄をもたらす源泉となられたのである。

その後本末一致、護法愛山の信念は上人の化導によりいよいよ倍増せられ、本興寺の堂宇坊舎更まりて寺観を一新し、本能寺は上人の法労により敷地係争問題を解決して、京都四条坊門に方四町にわたる大本能寺の偉観を呈するに至ったのである。

ここをもって上人延徳三年（一四九一）六月九日六十六才をもって示寂せられるや、本興寺、本能寺は共に中興の尊号を諡り、その遺徳を永く後昆に伝えんとしたのである。〔図版4〕

（この項は立正大学史学科創立三十五周年記念論文集「室町時代に於ける法華教団組織」にゆずる）

七　金剛院日與上人略年譜

応永三三（一四二六）　一才

日與上人摂州矢部郡尻池村に生誕

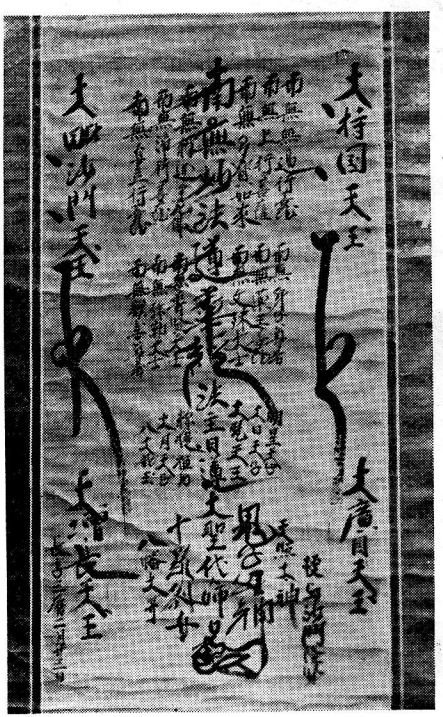
宝徳　二（一四四九）　二五才

兵庫真光寺（時宗）より日隆聖人の門に入る

同　六（一四六五）　四〇才

本興寺五祖、隆尊の第一周忌法要奉修

文正　一（一四六六）　四一才



図版5　日與上人御本尊　京都本能寺蔵

一条太閤を迎え本能寺大連歌会（一〇月一五日）、隆尊の第三回忌法要奉修

応仁　一（一四六七）　四二才

本妙寺本隆寺法度制定、教観樹扇録著述（四月九日）

同　二（一四六八）　四三才

権少僧都に任ぜらる（三月二九日）

文明　二（一四七〇）　四五才

隆尊の第七回忌奉修（能興両山）

同　三（一四七一）　四六才

本妙本隆両本寺法度、門徒尽未来際法度制定（一一月一日）

同　五（一四七三）　四八才

碧羅章著作（二月）、名目私案八帖述作始ム（八月）

同　七（一四七五）　五〇才

本能寺兼帯、同寺堂塔次第に完備、本尊授与（浄順四月）

同　八（一四七六）　五一才

隆尊の十三回忌法要奉修（能興両山）

文明一二（一四八〇）　五五才

隆尊の十七回忌法要奉修（能興両山）

金剛院日興上人について

金剛院日興上人について

同　一三（一四八一）　五六才

宗祖二百遠忌法要奉修（能興両山）、本尊授与（道善二月・四郎次郎八月）

同　一八（一四八六）　六一才

十四人連歌会（本能寺五月一三日）、本能寺敷地問題解決（八月一七日）

長享　一（一四八八）　六三才

隆尊の第廿五回忌法要奉修（能興両山）

延徳　一（一四八九）　六四才

本尊授与（隆賢二月二三日）、正永九月二四日、坊日号補任（法善坊日栄）

同　二（一四九〇）　六五才

本尊授与（隆祐四月）、法華和語記著述（一〇月五日）

同　三（一四九一）　六六才

本尊授与（日雅二月九日）、本興寺を日盛に譲る（四月一三日）本能寺に於て遷化（六月九日）

以　上